

## 万葉ラブストーリーコンテスト



先日NHKテレビで、万葉ラブストーリーの入選ドラマが放映された。万葉歌と、春の奈良をテーマにしたシナリオを一般から公募、入選作3点をテレビドラマにするもので、15分程度の短編だから僕でも書ける。で、応募して、落選した。まあ、ポポアの投稿と違って落ちるほうが普通だし、落ちたからといって人生に絶望するという事もないが、でも自信作だけだけに納得出来ない。そこで何故ダメだったのか、考えてみたんです。

シナリオの題は「佐保の春」。万葉歌を趣味にしている一人の平凡な主婦と、脳梗塞で身体の不自由な姑との心の交流を描いた、ごく平凡なドラマで、もう一人、同じように万葉歌に興味を持っている福祉介護士の若い男性が出てきて、平和な家庭にちょっとした波紋が生じる。そこで、この姑、すなわちおばあちゃんが、万葉歌を上手に賢く使って、家族の絆を確かめあう心あたたまる感動ドラマ、と本人が思っているだけだが、はっきり言って、筋なんかどうでもいい。奈良公園で男と女が会って、昔のフランス映画のような雰囲気、  
「一緒に鹿せんべいでも食べませんか」と男が言って、「それ、私に言うより、その鹿に言うたら」と女が答えて、まあ、そんな感じでいい……ことないけど、問題は春の奈良をいかに表現するかです。で、僕の場合、「桜」にしました。ラストが佐保川のお花見で、主婦とおばあちゃんが、自分の選んだ歌を桜の枝に結んで、それからおばあちゃんの車椅子を主婦が押して、桜並木を遠ざかって行く、平凡だけど小さな幸せ、そんな感じですね。

ところが入選したドラマを見ると、桜ではなくて、「梅」が春の風景に使われている。梅の木の下で愛を語ったり、お弁当を食べたり、破局を迎えたり、まあ、梅も春には違いないが、で、ポポア・ポコの「万葉植物の歌」の頁を見ると、やっぱり、「梅はあるけど桜はない!!!」

確かにね、万葉集には桜より梅の歌のほうが多いかもしれない。桜は古来から日本にあったけど、梅の木は中国原産で飛鳥時代が奈良時代に移入された外来種。つまり珍しい。どこにでもある桜よりも珍しい梅が、新し物好きの万葉歌人には人気があったということは十分に考えられる。大伴家持なんか自分の屋敷で梅見の歌会なんかしてますね。万葉歌人に人気があるということは、現代の万葉学者にも人気がある、実はこのコンテストの審査員は、奈良大学の万葉の上野誠先生なんです。そういえば、馬場先生も2月の芦屋の梅林では楽しそうに解説されてたのに、4月の桜の時はお見えにならなかったじゃないですか。わかりました、僕のシナリオが落選した原因は「桜」だったんです。

千鳥鳴く 佐保の川門の 清き背を 馬うち渡し いつか通らむ

若き日の大伴家持の歌。いつか佐保川を越えて会いに行きたいという意味でしょう。相手が誰かということは万葉集には娘とあるだけで実在する人物か



どうかもわからないのだが、僕のシナリオではこの歌を使って、会いたい相手を叔母の坂上郎女にして、家持と郎女をドラマの下敷きに使っています。少年家持が歌に志したころ、すでに有名人で、一族中の花形歌人の坂上郎女に恋心に似た憧れを抱いたという想定は、ありえると思うんですが、郎女のほうはどうなんだろう？。すると馬場先生はこう言われたんです。

「どうでしょう、大伴家は古い家柄の名門貴族ですから……」

なるほど、家持がこの歌を作った頃、郎女は2度の結婚を経て、30歳を十分に越えていたはずで、数年後には彼女の娘、大嬢と家持は結婚します。万葉に数多くの情熱的な歌を残した坂上郎女は、実は大伴家という家庭を守って子供達を育てた、美人でしっかりもののお母さん、そういうことでしょうか。

我が蔭ける 早稲田の穂立て 作りたる 蔓そ見つつ 偲ばせ我が背

結婚したころの大嬢が、夫の家持にあてた歌。いい歌ですね。万葉集の中で、現代に通じる家族愛の歌を残した大伴家の人々。そんな人達の歌を使って、家族のドラマをいつか書いてみたいですね。 (応募シナリオは末尾のURLのホームページにありますので、興味がある方は見てください)

春過ぎて 夏来たるらし 白たへの 衣干したり 雨の香具山

持統天皇がこの歌を詠んだのはもっと早い4月ぐらいだったかもしれないけど、6月14日もこの歌に相応しい日でした。香具山の深さを増した緑の中を歩きながら、先生の万葉の木や草の説明を聞くたびに覚えようと思いましたが、後で考えたら、アカネも、かしも、アラカシも、シラカシも、かすのきも、ヌルデも、すぎも、ひのきも、つきも、ケヤキも、ぬばたまも、ヒオウギも、ひるも、ノビルも、もむにれも、アキニレも、かつらも、サカキも、ささゆりも、くはも、くりも、こならも、みんなみんな青だった。まとめて言えば「万葉植物は染料にしたり、食料にしたり」と役に立つ、これでしょう。そういえば、桜はやっぱり役に立たなかったのかもしれない。

衣を干すとはどういうことだろう。5月の節句に鯉のぼりを納戸から出して青空の下に「干す」ように、神様の衣を出して干したのだろうか。楮(こうぞ)の樹皮などの植物繊維で織った布が「栲(たえ)」。それを色染めしないで作った「白たへの衣」は、神事で着る着衣で、また喪服でもあったそうです。この歌は初夏の季節を詠んだ叙景詩という説もあるらしいが、僕はそうは思わない。

持統天皇がこの歌を詠んだのが、天皇に即位した690年頃として、その4年前に夫の天武天皇に先立たれ、前年に最愛の息子草薙の皇子を亡くしている。愛する人を失った悲しみを乗り越えて、自ら神になる決意をした持統天皇が、香具山の上に見たものは、白たへの衣を着て天に昇っていく二人の姿であり、神になる自らの姿であったに違いない、と思うのです。